

聖女は
トゥルーエンドを望まない

文月 蓮

REN FUMIZUKI



ノーチエ文庫



ヴィヴィアーヌ

レオンに仕える魔将。
嗜虐的な性格。

ジェラルール

レオンに仕える魔将。
獐犢で好戦的。

エルネスト

勇者パーティの騎士。
頼れる兄貴肌で、
皆のまとめ役。

ユベール

勇者パーティの
魔法使い。
可愛い外見と
裏腹に辛辣。

リュカ

神託に選ばれた勇者。
真面目で礼儀正しい
好青年だが、マリーに対し
過保護な一面も。

レオン

勇者一行の
倒すべき魔王であり、
前世からのマリーの推しキャラ。
傲慢だが誇り高く、情が深い。
とあるきっかけでマリーと
出合い、惹かれていく。

マリー＝アンジュ

勇者パーティの聖女。
前世で好きだった乙女ゲームの世界に
転生したことに気づき、
推しキャラの魔王を救うため奮闘する。
優れた癒しの力を持つが、
少々うっかりなところも。

登場人物紹介

目次

聖女はトゥルーエンドを望まない

7

書き下ろし番外編

夢は逆夢

355

聖女はトゥルーエンドを望まない

プロローグ

「レオン様……やばい、尊いよ……」

茉莉はデイスブレイに映る、魔王の姿を熱心に見つめた。

十八禁乙女ゲーム『テラ・ノヴァの聖女』にラスボスとして登場する魔王レオンは、茉莉いち推しのキャラクターだ。

ややキツめな目つきに、長い黒髪のスラリとした長身の青年は、茉莉の好みのド真ん中を打ち抜いている。

このゲームは、聖女として教会で育てられた箱入り娘のヒロインが、勇者やその仲間たちと共に、人に仇なす魔物と諸悪の根源である魔王を倒す旅を描いた、ありがちなストーリーである。

流麗なイラストと、豪華なキャラクターボイスにつられて購入した茉莉がはまったのは、敵方として登場する魔王様ことレオンだった。

だが、当然ゲームの本編では、敵であるレオンは攻略対象に設定されていない。それどころか、ほとんどのエンディングでレオンは死を迎えてしまうのだ。茉莉は何度も悔し涙を流したものだ。

しかし、ついにそんな問題も解消される。

昨日ようやく手に入れたこのファンディスクでは、レオンを攻略相手として選ぶことができるようになったのである。

週末だったということもあって、昼夜ぶっ通しでプレイした茉莉は、どうにか終盤までストーリーを進めてきた。

『おまえの癒しの力を、俺に与えよ』

低く艶のあるボイスが、ヘッドフォンで聞いていた茉莉の腰を直撃する。

「はう……」

ゲーム中でのヒロインの役割は、聖女として勇者たちの回復や補助を行うことだ。神に祈りを捧げることによって傷を癒し、体力だけでなく魔力さえも回復させることができる。

更に相手に自分の体液を摂取させると、ずば抜けて高い効果の癒しを与えられるのだ。唾液や涙、汗、そして愛液にまで特別な力が宿っている。そして体液を摂取させると

好感度が跳ね上がる——いかにも十八禁ゲーム的な仕様である。

だが体液による癒し^{いや}を与えられるのは、たったひとりだけ。

そして今、敵だったはずのレオンがヒロインの前に現れ、体液による癒し^{いや}を請うている。茉莉は画面に現れた選択肢のどちらを選ぶべきか、迷いに迷っていた。

「【いいよ】、【そんなの無理】。うーん、どうしよう。ここの選択肢、間違えちゃダメなやつだ……！」

レオンの口調は俺様で、性格も同様。けれど一度気を許せば情が深い。傲慢^{ごうまん}な態度はとるが、それは自分の力や責任に対する誇りの裏返しだ。

そんな彼を攻略するならば、やはり責任ある言動が求められるだろう。勇者をサポーターする立場である聖女としての役割を放棄するような答えより、彼を拒む【そんなの無理】が一見すると正解に見える。だが——

「ここはあえて【いいよ】で——」

『ふ、よい答えだ。これよりのち、おまえは俺のものだ』

傲慢^{ごうまん}な笑みを浮かべたレオンのスチルが画面いっぱいに映る。

その手が主人公の顎^{あご}にかかり、唇が近づいてくる。そっと唇が触れ、レオンの目が満足げに細められた。

「はうっ……」

念願の魔王攻略が叶った——茉莉はレオンの顔をうっとり見つめた。

それから場面は移り変わり、レオンは勇者たち一行に追い詰められて絶体絶命のピンチ^{おち}に陥る。だが、これは魔王攻略ルート。きっとこの先には、レオンが生存する展開が待っているだろう。

いよいよクライマックスだ。魔王城の玉座の間が映し出される。

玉座の間は戦闘によって破壊しつくされ、今にも崩れ落ちそうになっている。その冷たい床に、レオンが横たわっていた。

『ふ、聖女が手に入れば運命が変わるかとも思ったが、なかなかうまくいかぬものだ。だが、この星が俺の魔力によって癒^{いや}されるならば、それでもよいか……』

美しい空色の瞳で、壊れた城の隙間から見える空を見上げ、キラキラと光の粒子に変わっていくレオンの姿。

「えー！ どこかで選択肢間違えた？」

しかし、無情にもスタッフロールが流れ、最後にトゥルーエンドの文字が表示される。「なんで……なんで、これがトゥルーエンドなの……!? こんな絶対認めないんだからー！」

茉莉の叫び声が、ワンルームのアパートの室内にむなしく響いた。

第一章 げ、ゲームキャラが三次元になって、目の前にいるんですけど！

「嘘でしょ……？」

彼らと引き合わされた瞬間、マリリーの頭の中に怒涛（ビョウ）のように記憶が流れ込んできた。

——これって、まさか『テラ・ノヴァの聖女』じゃ……！

勇者リユカ、魔法使いユベール、そして聖騎士エルネスト。目の前にいる彼らの名前は十八禁乙女ゲーム『テラ・ノヴァの聖女』の登場人物と完全に一致していた。

魔物が跋扈（ばつこ）する、剣と魔法の世界。魔王と、勇者や聖女たちが対立する世界。

あまりに一気に流れてきた記憶に、マリリーは一瞬ここがどこだかわからなくなる。目の前が暗くなり、マリリーはふらりとよろめいた。

「大丈夫か？」

よろめいた彼女をすかさず支えたのは、紹介されたばかりの勇者リユカだった。

幼い頃に修道院に引き取られ、そのままほとんど異性と接触することなく育ったマ

リリーは、慣れない男性との触れ合いに思わずびくりと震えてしまう。

マリリーの怯え（おび）に気づいたリユカは、そっと彼女から手を離した。

リユカの気遣いに、マリリーは小さく息を吐く。

見上げた彼の顔には心配そうな色があった。

リユカの明るい金髪は短く整えられていて、きりっとした顔立ちを引き立てている。

そんな端正な容貌（ようぼう）にさえ、今のマリリーは見惚れている余裕はなかった。混乱（おそわい）に陥（おちい）りながらも、どうにか表情を取り繕う。

「……少し緊張しすぎてしまったみたい……です」

マリリーはリユカに向かってあいまいな笑みを浮かべてみせる。

「俺も教皇（けい）下（か）にお会いするのは初めてだし、緊張するのはよくわかる」

リユカは彼女を安心させるように柔らかに微笑んだ。

「すみません」

マリリーは深呼吸をして、ぐらぐらしそうになる身体を支えようと懸命に足を踏ん張る。リユカの声は、マリリーの前世茉莉がゲームのプレイ中に何度も聞いた声優の声にそっくりだ。

よみがえった記憶は、ここが間違いなく十八禁乙女ゲーム『テラ・ノヴァの聖女』の

世界なのだと告げている。

しかもマリリーの立ち位置はゲームのヒロインそのままだ。

——のおおお、ここが十八禁乙女ゲームの中だなんて、聞いてないんですけどー！
マリリーは心の中で絶叫した。

数日前、マリリーは突然教会の総本山である大聖堂に行くようにと、修道院長に命じられた。なにがあるのか全く知らされず、言われるままに大聖堂にやってきた。

そして、いきなり三人もの男性を紹介されたのだ。しかもこれから教皇との謁見^{えうけん}が控えているという。

そんな時、この世界をゲームとしてプレイしていた茉莉の記憶がよみがえったのだ。

マリリーはこれまで修道院からほとんど出ることなく育った。そしてこの身体には特別な力が宿っていること、いずれ聖女としての務めを果たすのだということを教えられてきた。

だが、聖女としての務めが、まさかめくるめく十八禁の世界へ足を踏み入れることだったとは。しかも、ゲームのシナリオ通りなら、魔物に襲われることもあるかもしれないや、ちよっと落ちて着こう。茉莉として現代日本を生きた記憶が正しいとするなら、この世界はゲーム——虚構という可能性もある。マリリーは必死にそう思おうとした。

けれど、これまでマリリーとして生きてきた十八年分の記憶が、目の前の光景もまた現実なのだと主張している。

このままいけば、マリリーの身にはシナリオ通りに様々な困難が降りかかるだろう……性的な意味で。

それを認めたくない気持ちと、認めざるを得ない目の前の光景に、マリリーは頭がおかしくなりそうだった。それでも溢れそうになる前世の記憶になんとか蓋をして、現実と向き合うことを優先する。

リユカを筆頭に、魔法使いのユベール、聖騎士のエルネストもこちらを心配そうにうかがっていた。

——だ、ダメだ。ここで下手な対応をとると、変なフラグが立つちゃう。ここはストーリー通りに進めてみよう。

『テラ・ノヴァの聖女』は、とにかく難易度が高く、ささいな選択ミスが即死バッドエンドに繋がる。ゲームをやり込んだ茉莉でさえ、全てのバッドエンドを把握しきれていないほどだ。

下手なことをして一気にバッドエンドに進んではたまったものではない。ここは慎重に対応しなければと、マリリーはなんとか笑顔を作り、大丈夫だとアピールする。

「ええと、君の名前をまだ聞いていなかったね」

リユカはキラキラした笑みを浮かべながら、マリーの名前を尋ねる。

先ほどは自己紹介をする前に記憶がよみがえってしまい、それどころではなかった。初対面の挨拶ができないのは社会人として失格だろう。マリーは改めて、皆に向かって軽く頭を下げた。

「私はマリー＝アンジュと申します。サントワヌの修道院より参りました。どうぞマリーとお呼びください」

「マリーだな。君とはこれから長い付き合いになりそうだし、そんなにかしこまらないでくれると助かる。もっとフランクに話してくれ」

——さすが、爽やか王子だあ。

ファンのおかげで爽やか王子という異名をとるだけあって、リユカは正統派な王子様タイプのキャラだ。

にこりと笑いかけてくるリユカに、マリーは少々引きつりつつも、あいまいな笑みを浮かべた。

——やっぱりかっこいい……けど、タイプじゃないんだよね……

リユカは神託によって勇者に選ばれ、田舎の村を出て聖都にやってきた。三人姉弟の

末っ子で、お姉さんたちの影響を強く受けて育ったという設定だ。女性には優しく、紳士的な態度を崩さない。だが、あまりに王道すぎて、茉莉の好みではなかった。マリーとして実際に対面しても、やはりその印象は変わらない。

——それにしても、フランクに話してほしいと言われてもなあ……

できれば勇者たちとは関わることなく、平和に過ごしたい。そのためには、彼らとできる限り精神的に距離を置きたい。よって、敬語で話すくらいがちょうどいいと思うのだが……

——つて、はっ。やばい、ここでリユカに嫌われでもしたら、死亡フラグまっしぐらでは!?

リユカの提案に逆らって敬語のままだとバッドエンドに突入し、序盤で死亡する危険性がある。

マリーはキュッと唇を引き結んだ。

「はい。よろしくお願ひしま……よろしくね」

「ああ、こちらこそよろしく」

リユカがマリーに向かって手を差し出した。

修道院で育てられたマリーにとって、男性と触れ合うことはかなりハードルが高い。

前世の記憶を参考にしようと思ったが、茉莉は男性経験のない、いわゆる喪女だったため、まるで役に立たなかった。

マリーは差し出された手をおずおずと握り返した。

リユカとの挨拶が終わると、続いて大柄な男性が進み出る。

「俺は聖騎士のエルネストだ。改めてよろしく頼むぜ」

きらりと白い歯がのぞく。

エルネストはいかにも聖騎士だと主張するように、白い騎士服に身を包んでいる。背が高く、肩幅も広くて筋肉質で、日に焼けた肌と赤い髪が特徴的だ。この中では一番の年長者となる。

——あつ、アニキだあ……！

攻略キャラのひとりであるエルネストは、頼れるアニキポジションのキャラだ。ゲームの設定によると、小さい子供の多い修道院で育ったため、年下の面倒を見るのがうまい。ただしちよつとエロいことを言うのが玉に瑕^{きず}。茉莉の好きだったキャラのひとりだ。ただし、好きといってもそれは恋愛感情というより、彼の包容力に対する憧れに近い。マリーは憧れのアニキに出会えた感動を、静かに噛みしめた。

続いて少し幼さの残る少年がマリーの前に出た。



「僕は魔法使いのユベール。よろしくねー」

ユベールはマリーよりも少し年下のはずだった。柔らかなブラウンの髪に、くりりとした琥珀色の瞳。かっこいいというよりは可愛らしい顔立ちで、いまだ成長途上にある手足はほっそりとしている。

——うわ、可愛い。

ユベールは名門の魔法使い一家に生まれた生粋の優等生だ。素はかなり辛辣だが、童顔腹黒キアラとして一部のお姉さま方にとっても人気があった。そんな腹黒さを綺麗に覆い隠し、無垢な笑みをマリーに向けている。とても可愛い顔をしているが、彼もまた茉莉の好みではなかった。

「よろしくお願いします」

マリーが改めて挨拶を交わしたところで、修道女から声をかけられた。

「皆様方、祝下がお待ちです」

「ああ、ありがとう。祝下をお待たせしてはいけないね」

そうして案内された大聖堂は、壁一面がステンドグラスに彩られていた。神の威光を知らしめるのに相応しい荘厳さに溢れている。

ステンドグラスが描き出す美しい光の模様に、マリーはほうつと感嘆の息をこぼした。

緋色の毛氈が敷かれた祭壇には、司祭たちが並んでいる。マリーたちがその向かいに並ぶと、しばらくして豪華な司祭服を身に纏った教皇が姿を現す。

茉莉としての記憶から、これから教皇が話す内容は想像がついた。

「聖都オディロンへようこそ。聖なる父に選ばれし勇者たちよ」

ゲームでプレイしたシーンが、現実のものとして目の前に現れる。

今から行われるのは、勇者一行に魔王討伐を命じる儀式だった。

「そなたたちをここへ呼んだのはほかでもない。父の子らたる民が魔物たちの跳梁に苦しめられていることはそなたらも知っていることだろう。民たちをその苦しみから解き放つべく、魔物討伐の旅に出てほしい。そしてゆくゆくは、全ての元凶たる、魔王を打ち倒すのだ！」

ゲームと寸分違わぬ台詞に、マリーは一瞬気が遠くなった。

——やばい、これじゃ本当に私が聖女になってしまう！

このままではマリーは聖女として勇者たちと打倒魔王の旅に出て、十八禁の世界に足を突っ込むことになる。

まともに恋愛をする機会もないまま育てられた自分が、誰かとそういった関係になること自体、想像もつかない。なによりマリーが望むのは、胸をときめかせるような恋愛

や、めくるめく官能的な体験ではなく、平凡で穏やかな日々だった。

それでも、誰かひとりを選ばなければならないなら。

——どうせ恋をするなら、レオン様がいいなあ……

聖女の役目から逃れられないのなら、その相手はせめて最推しだったレオンがいい。目の前であの美貌を目にし、あの声を聞いたのならどれほど素晴らしいことだろうか。

いや、もちろん十八禁の展開にならずに済むならば、そのほうがいいに決まっているが——

叶うことなら、聖女の役目を辞退し、元々住んでいた修道院に逃げ帰ってしまいたい。とはいえ、世界を救うべき聖女が旅立ちを目前に逃げ出したとなれば、マリリーの居場所など、どこにもなくなってしまうだろう。

——ゲームじゃ、そもそも聖女にならないという選択肢なんてなかったよね……。どうしたらいい？

マリリーは必死になって茉莉の記憶を思い起こし、逃げ道を探る。けれど教皇の言葉が気になって、なかなか集中できない。

「勇者リユカ」

「はい」

リユカは誇らしげな表情で教皇の前に進み出た。

「そなたは聖なる剣に選ばれた。教会に伝わる聖遺物のひとつ、聖剣を託す。民の希望となるべく精進するがよい」

教皇は司祭から豪華な装飾の施された剣を受け取ると、それをリユカへ差し出す。

「最善を尽くします」

リユカは恭しく頭を下げ、聖剣を受け取った。その瞬間、剣がきらりと輝いたような気がした。

「聖騎士エルネスト」

「はっ」

教皇の声にエルネストが進み出る。

「そなたには聖遺物のひとつ、この聖盾を託す。いかなる時も皆を守り導くよう願う」
教皇はエルネストに光り輝く盾を下賜した。

「心得ましてございます」

エルネストは、ふたりの司祭がよろけながら運んできた盾を軽々と受け取る。横から見える彼の顔は興奮にほんのりと赤く染まっていた。

「魔法使いユベール」

「はいっ」

「若いそなたは迷うことも多かろう。だが、この国の未来のためにそなたの力を尽くすのだ。この聖なる衣はいかなる時もそなたを守るだろう」

ユベールは教皇から聖衣を受け取った。

「承知いたしました」

「それから、聖女マリー」

「……はい」

返事をしたマリイの声は震えていた。

——ここまで来たら、私しかないよねえ……

やはり聖女に選ばれてしまったのだと、マリイの胸に諦念が湧く。

マリイはため息を殺し、恭しく頭を下げながら教皇の前に進み出た。

「神の声を聞くことのできるそなたは、紛う方なき聖女である。聖なる杖をそなたに。その癒しの力を存分に振るうがよい」

「御心に適うよう、努めます」

光り輝く杖は見た目よりも軽く、マリイが握るとちょうどよく彼女の手の中に収まった。

「さあ、旅立つがよい。そなたたちの行く先に神の祝福を！」

「神に感謝を！そして、勝利の誓いを！」

ゲームの記憶と違わぬ展開に、マリイの心に弱気が忍び寄る。

やはりストーリーからは逃れられないのかと、教皇の鼓舞に応える勇者たちの姿を見つめながら、マリイはため息を禁じえなかった。

教皇との謁見を終えたマリイたちは、大聖堂から場所を移していた。

明日の立出に向け、旅に必要な準備を整えるためだ。

マリイは宛がわれた部屋に入ると、糸が切れたようにベッドに倒れ込んだ。

——どうしてこんなことになったのー!?

マリイは大声で叫びたかった。けれど心のままに叫べば不審者確定だ。口を押さえてゴロゴロとベッドの上を転がる。

幼い頃から神の声を聞くことができたマリイは、聖女候補として育てられてきた。だから、自分が聖女としての使命を果たすことに、拒否感はなかった。けれどもそれが十八禁方面とは。

など夢にも思わなかった。

いずれにせよ『テラ・ノヴァの聖女』は女性向け恋愛シミュレーションゲームなので、攻略対象である勇者たちとの関わりを避けられないことは、容易に想像がつく。

マリィは目の前に迫る現実には、ぶるりと震えた。

——どうしよう。あの中の誰かと恋人になるとか、絶対に無理っ！

そんなことになるくらいなら、聖女の役割など投げ出してしまいたい。

マリィが頭を悩ませていると、コンコンと扉を叩く音に思考を中断された。

「なにかな？」

扉の向こう側に向かって、マリィは声をかける。

「エルネストだ。少しいいかな？」

——ま、ま、まさか！ ここでイベント？ あ、そういえば……

マリィはこの出発前のタイミングで、好感度の上がるイベントが発生するを思い出した。最初の顔合わせを経て、最も好感度の高かった相手が、部屋を訪ねてくるといふものだったはずだ。

ここで好感度を上げすぎると、エルネストのルートに確定してしまう可能性もある。だが下手を打てばバッドエンドに進みかねないので慎重な対応が求められる。

マリィは慌ててベッドから立ち上がり、扉に飛びつく。

勢いよく開けられた扉に、エルネストは少々目を丸くしていた。

「な、なんでしよう？」

挙動不審なマリィに向かって、エルネストは男らしい笑みを浮かべた。

「いや、少し話がしたくてな」

「ええと……」

男性を部屋に招き入れることに抵抗があったマリィは、しばし逡巡する。

「なに。そう長くはならねえ。扉も開けておくから、不埒な真似をすればすぐにばれるさ。心配なんていらねえよ」

そこまで言われてしまつては断ることもできず、マリィはしぶしぶエルネストを部屋に招き入れた。

「……どうぞ」

「ああ。すまねえな」

エルネストは部屋に用意されていた椅子に腰かけた。

普段マリィが暮らしている部屋よりかなり広いはずなのに、大柄な彼が椅子に座っているだけで、部屋が小さく見える。

マリィは扉を開け放ったままにして、エルネストの向かいに腰を下ろした。

「明日からいよいよ旅に出ることになるが、その前に親睦を深めておくのもいいかと思ってる。場合によっちゃ命を預ける間柄だ」

「親睦……？」

マリィはわずかに眉をひそめた。

アニキとして憧れる気持ちはあるが、ここで油断してはいけない。『テラ・ノヴァの聖女』では簡単に十八禁展開へ進んでしまうのだ。ほどほどに好感度を維持しつつ、上がりすぎもしないよう注意する。

「ああ。そんなに怯えなくていい。ずっと修道院で育ったんなら、無理もねえが。俺も修道院で育ったから少しはわかる。昔は女の子と話をするだけでびくびくしたもんだ」

エルネストは昔を思い出したのか、遠い目をした。

——ええと、こういう時は相手のことを聞くのが無難だよ。なにしろ私はシナリオを知っている。下手に自分の話をして、今の私を知るはずのない情報をぼろっと漏らしちゃったらマズい。あなたに興味がありますよーってアピール程度にしておこう。

エルネストからの好感度をほどほどで抑えたいマリィとしては、選択を間違えられない。ゲームの知識でエルネストの背景については知っていたが、あえて尋ねる。

「エルネストさんはどこの修道院で育ったの？」

「ああ、俺のことは呼び捨てでいいぞ。俺はカブレの修道院だ。マリィとは違って、男ばかりの修道院だったがな。だが、そのおかげで聖騎士になれたし、こうして勇者一行に加わることもできた。自分の境遇に不満はねえさ」

マリィは自分の振った話題が本当に正解だったのかと、びくびくしていたが、エルネストの様子を見る限り、さほど好感度が上がったようには思えない。とりあえずは間違わずに済んで、肩から力が抜けた。

「そう……なの」

誇らしげに笑うエルネストを見ると、私は聖女になどなりたくなかったとは到底言えない。

「マリィは聖女として選ばれたのが不安そうだな。それとも不満……か？」

「そんな……ことは」

エルネストに気持ちを言い当てられて、マリィはぎくりとする。

できれば役目など投げ出してしまいたい。

それでも、魔物に苦しめられている人々がいるのも現実で、彼らを救うために必要なことだと言われれば、無下にもできない。

「私にながでできるのか、不安があるのは確かです。それでも、選ばれた以上最善を尽くすしかないって思ってる。自信がないからって、他人に押し付けるような真似はできないよ」

さっきまでは逃げることはばかり考えていたのに、不思議とその言葉がするりと出てきた。

それはマリーとしてこの世界で生きてきた自分の、偽りない気持ちだった。

「不安なのは俺も、そしてリユカやユベールも同じだ。今は互いのことをよく知らねえから、不安だって大きいだろう。これからゆつくりと慣れていけばいいさ。誰だって最初から勇者だったわけじゃあないんだからな」

——さすが、アニキ！ やっぱりかっこいいなあ……

ゲームと違わぬ気配りと包容力に、マリーは感服した。これが、エルネストがファンのあいだでアニキと呼ばれているゆえんだろう。

「はい。ありがとうございます」

「これから一緒に頑張ろうぜ！」

エルネストはマリーの様子が気になって訪ねてくれただけのようで、話はそこで終わった。

——アニキって本当にいい人だなあ。

どうにかつがなくイベントを終えることができた、マリーは油断していた。

「マリー、よい夢を。俺は、おまえの癒しを受ける者選ばれたら嬉しいぜ？」

エルネストが手を伸ばし、彼女の頬をそつと撫でた。そして、色気を含んだ流し目を送ってくる。

「ひっ」

——ぎゃー！ なにこれ、ナニコレ？

唐突な接触に、マリーはパニックになった。

目を大きく見開き、硬直するマリーに、エルネストはふつと笑いを漏らす。

エルネストの台詞から推察するに、彼はマリーの体液に癒しの効果があることを知っている。癒しが欲しい——つまりは、ベッドでのあれこれを含む癒しの行為へのお誘いだらう。

「ど、どうして知って……!？」

「俺だけじゃないぜ。リユカとユベールだって知ってるさ。聖女が選んだ、たったひとりにだけ与えられる特別な癒しの方法については……な」

エルネストはにやりと笑みを浮かべている。

「そんなあ……」

「まあ、そのことは教会でも極秘事項になっている。知っている人間はそれほど多くないはずだ」

体液による癒しはゲームの中では当たり前の設定すぎて、どこまで知られているのか気にしたこともなかったが、皆が知っているとなると恥ずかしすぎる。

教会の関係者だけなら仕方ないことだが、そんなエロ特化の設定がパーティメンバーに知られていることに、マリィは打ちのめされた。

呆然とするマリィをよそに、エルネストは軽く片手を上げて挨拶をすると、あっさり立ち去った。

——見事な引き際だ。だけどさすがは十八禁乙女ゲーム。油断ならぬ……

マリィは固まったまま彼のうしろ姿を見送る。

「はっ、固まってる場合じゃなかった」

この世界で生き残っていくためには、情報が必要だった。

選択を誤れば死亡フラグに直結しかねない世界において、情報は生命線だ。

なにより、まずは頭の中を整理したかった。

マリィは机の中から紙と筆記具を取り出すと、思い出した記憶を思いつくままに書き

出していく。

「メインの攻略キャラは勇者リユカ、魔法使いユベール、聖騎士エルネストだったよね……」

マリィは思い出した名前を書き連ねていく。

いずれもそれぞれに魅力を持つキャラクターたちだ。突然のことに驚き、戸惑いはしたものの、彼らが実際に三次元で動いている姿を目にすることができたのは、やはり嬉しい。

美しく描かれていたイラストの人物が実際に動いて、声優と同じ声で話している。落ち着いて考えてみれば、ゲームの登場人物たちのファンだった茉莉——マリィが興奮しないはずがなかった。

「それから、なんといってもレオン様——」

マリィは一番好きだったキャラクターの名前を、丁寧に紙に書き込む。

魔王であるレオンは勇者陣営とは敵対しているため、本来聖女との接点はない。

本編では攻略キャラではなかったが、陰のある美貌と、流麗なイラストで人気を博し、ついにはファンディスクにおいて攻略キャラとして登場するまでになったキャラクターだ。

ファンディスクでは、本編で明かされなかった魔王の背景が描かれている。

魔王は、魔物を生み出し世界を破壊しようとする諸悪の根源——そう信じた勇者たちが魔王を倒すというのが本編でのストーリーだ。

しかしファンディスクでは、この星が傷ついているということ、魔王は世界を破壊しようとしていたのではなく、傷ついた星を癒すために膨大な魔力を必要としていたのだという真実が明らかになる。魔王も勇者と同じく、この世界を救うためにひとり戦っていたのだ。

そんな真実を知ったヒロインは魔王と恋仲になるのだが、結局魔王が勇者リユカによって倒され、死によって解放された魔王の魔力が星を癒すという結末だった。

——あんなの、絶対にトゥルーエンドじゃないし！

マリィは内心で鼻息を荒くした。

魔王レオンを攻略できるようになったとはいえ、彼を救うことができないのならば全く意味がない。マリィは、レオンが最期を迎えるスチルを見ながら、悔し涙を流したことを思い出す。

「ストーリーは面白いし、キャラはそれぞれに魅力があつて最高なのに、どうしてエンディングだけがダメダメなのよ！」

勇者が魔王の真意に気づき、ふたりが協力していれば誰の命も犠牲にすることなく助けられたのではないかと、茉莉はずっと考えていた。

「私は、どのエンドに向かえばいいんだろう……？」

マリィがヒロインの位置にあることは、どうやら変えようがない。

ハッピーエンドを選択するならば、このまま勇者たちと共に魔物を倒し、魔王を討伐、そして勇者一行の誰かと結婚だ。

リユカ、ユベール、エルネスト。いずれも素敵な人たちではあるのだろう。少なくともゲームの中の彼らは素敵だった。

現実のエルネストとは少し話してみたのだが、ゲーム内での性格とほとんど差は感じられなかった。

けれど三人の誰かとハッピーエンドを迎えるのは、今のマリィには想像ができなかった。せいぜいお友達エンドとも呼ばれる、ノーマルエンドが精一杯だ。

それ以前に、ささいな行動で死亡フラグが乱立する状況で、死なない自信がない。

それでも、もしもこの世界で、生きることが叶うのであれば。

「やっぱり、生レオン様に会ってみたいなあ……」

——そして、できることならレオン様を死の運命から救いたい。

マリィはファンディスクでのエンディングを思い出す。
絶対にあんな風に彼を死なせたたくない。

魔王と勇者が本当は対立する必要がないと知っている自分ならば、このゲームの世界の結末を変えることができるのではないか。それこそが、自分がこの世界に生まれ変わった意味なのではないか。そんな気さえしていた。

それに、マリィが知っているのはそれだけではない。聖女は生まれ持った特別な力で、望む相手のいる場所へ転移——瞬間移動する魔法を使うことができるのだ。

何度でも使えるものではなく、たった一往復きりの力だが、移動手段の少ないこの世界ではチート級の魔法だ。

本来であればゲームの終盤で明らかになるこの設定も、ゲームをやり込んだ茉莉ならば、今すぐにでも使えることを知っている。マリィが望みさえすればおそらく一度だけ、魔王レオンのもとへ一瞬で飛んでいけるはずだ。

だが、ことは慎重を要する。安易にストーリーを改変してしまえば、マリィが知っているイベントや攻略方法が使えなくなってしまう、のちのちどんなしわ寄せが来るかわからない。

うっかり死亡フラグを立てて、レオンの前に自分が死んでしまつては意味がない。こ

こはあえてストーリー通りに勇者たちと行動を共にし、レオンを助ける機会をうかがうほうがいだろう。そしてその機会が来た時に困らないよう、力をつけておきたい。

いずれにせよレオンを救うためには魔王城へ行く必要がある。勇者たちと行動を共にしながら、レベルを上げていくのは、一石二鳥のように思えた。

方針が決まったところで、気が抜けたのか一気に眠気が押し寄せてくる。

「ふあ……」

マリィは大きなあくびをすると、ベッドに身体を横たえた。

前世の記憶がよみがえったことと、教皇との謁見えうけんというふたつの精神的疲労にマリィの意識はすぐに眠りに引き込まれていった。

翌朝、多くの人々に見送られて、勇者一行は聖都を旅立った。

城壁から出たところで、一行の足が止まる。

「まずは川沿いに東へ向かって移動。練度を上げつつ、海に出たら北進して魔王城へ向かおうと思う。それでいいかな？」

マリィはリュカの決めた進路に異論はなかった。

国土のほとんどが森林におおわれるこの国では、東西に伸びる川沿いに都市が点在し

ている。魔王城は聖都から北東の方角、深い森を抜けた先だ。森林には魔物が多く生息していて、容易くは進めない。多少遠回りにはなるが、川沿いに進み、都市にある教会で補給を受けつつ移動するのは、妥当な選択だと思えた。

それに教会へ寄ることにはもうひとつの利点がある。聖女であるマリーが祭壇で神に祈りを捧げることによって、教皇から授かった装備に神の加護を得ることができるのだ。加護があれば攻撃力が上がるだけでなく、新たな技を覚えることができる。更にマリー自身の魔力も、大幅に上げられるのだ。

加護の利点について、勇者たちや教会関係者は知らないようだった。だとすればこれはゲームをやり込んだマリーしか知らない、裏技のようなものだ。ここはぜひとも教会に寄っておきたい。

そこに異議を唱えたのはユベールだった。

「ええー、めんどくさい。ばばーんと一気に北上して魔王城に向かうよー！」

——きた！ 旅のルート選択イベントだ。ここでちゃんとしたルートを選ばないと、レベル上げに苦労するんだよねえ……。それにしても、ユベールって可愛い顔してなにげに脳筋だったんだなあ。

マリーは記憶にある通りの彼の台詞に、ため息を吐きなくなった。

エルネストが表情を変えて、止めに入る。

「ばつかりやう！ 戦いに慣れているおまえや俺はそれでもいいが、戦いも旅もし慣れていないリユカとマリーには無茶だ。魔王を倒すには、ふたりの成長が絶対に必要なんだ。そんな簡単に済むものなら、わざわざ教皇陛下が俺たちを集めて一緒に旅立たせるわきゃねえだろうよ」

勇者パーティの良心がきつちりと働き、ユベールをたしなめてくれたことにほっとする。

「そりゃ、そうだけどー」

エルネストに同意しながらも、ユベールはいまだに不満そうだった。

ゲームをプレイしていた時から思っていたのだが、ユベールは知的そうに見える魔法使いの割に、考え方がやや短絡的なきらいがある。このままユベールの意見に従うのは危険だというのはわかっていた。

マリーが顔を上げると、眉根を寄せ、険しい表情をしたリユカと視線がぶつかった。

——このままじゃ、ダメだ……！

リユカとマリーの心の声が一致した。ふたりは顔を見合わせ、同時にうなずく。

「すまないが、戦いに慣れるまでは俺の提案した旅程で行かせてほしい」

マリーも続けて畳み掛ける。

「ユベールさんの言う通り、いきなり大本を攻撃するというのもひとつの手段だとは思いますが。けれど今の私たちでは力も経験も足りません。それに各地で勢力を伸ばしている魔物を倒していけば、魔物の脅威に苦しむ人々を救えますし、同時に魔王の力を削ぐこともできて、一石二鳥ではありませんか？」

そもそもこういったゲームでは、経験値を積んでレベルを上げ、装備を整えてからラスボスに向かうのが常道のはずだ。今の状況では、布の服一枚でラスボスに挑むのと変わらない。

『テラ・ノヴァの聖女』は本格的なRPGではないものの、戦闘や育成といったゲーム要素もそれなりに楽しむことができた。

——ちゃんとレベル上げながら行こうよ？　ね、ね？　それが最終的には、一番楽にラスボスのところまでたどり着くルートなんだから。

マリーは期待を込めてユベールを見つめた。

「一石二鳥……ねえ」

ユベールの疑わしげな顔に、マリーは焦った。

「ユベール、いい加減にしろよ」

「はあーい」

エルネストの機嫌の悪そうな低い声に、ようやくユベールは諦めてくれたらしい。

マリーはほっと胸をなでおろす。

「ふふ。冗談だよ。一応自分たちの実力は把握しているみたいで、安心したー」

にやりと笑ったユベールに、マリーはわなわなと震えた。

——む、むっかつく……！　やっぱり、ユベールって腹黒すぎだよ！

そういうえば、ユベールは慣れない相手に対して、試すような行動をとることがあるのをマリーは思い出す。

改めてユベールの言葉は額面通りに受け取らないほうがよさそうだと、マリーは気を引き締め直した。魔法使いという人種はなかなか侮れない。

「よし。じゃあこっちだね。整備された街道を通るから強い魔物はいないはずだけど、注意しながら行こうかー」

にこにこ一行を先導するユベールの背中を、マリーは恨めしく思いながら見つめた。「リユカ、マリー、悪いな。ふたりともあまりユベールのことを悪く思わないでくれ。あれでもあいつに悪気はないんだ」

——悪気なく試すようなことを言うほうが、問題あると思うけど？

マリィはどうか不満を心の中に押し込める。

「そう……ですか」

「エルネストがそう言うなら……」

マリィとリュカは複雑な表情でうなずいた。

命を預ける相手を試したくなる気持ちにはわからないでもないが、これでは逆に溝が深まってしまふのではと心配になる。

「おい、先に行っちゃうよー?」

ユベールはるか先でのほほんと手を振っている。マリィやリュカの不満など、どこ吹く風と言った様子だった。

マリィは腹を立てているのがばからしくなってきた、思わず笑ってしまった。

「もうっ……ふふ」

「さあ、気を付けて行こうぜ!」

「はい」

マリィは杖を握りしめて、旅立ちの一步を踏み出した。

平坦な道が続く街道は遠くまで見通せる。時折、茂みががさがさと音を立てて揺れるのが見えた。

マリィは魔物が現れたのかと、びくつきながら街道を進んでいく。

「魔鼠だ!」

先頭を行くユベールの声に、皆は素早くそれぞれの得物を構えた。

盾を構えたエルネストが前に進み出る。

「俺が敵を引き付ける。リュカは隙を見て攻撃。ユベールはいつも通りで頼む。マリィは後方で待機。君の出番は戦闘終了後だ」

「はいっ!」

エルネストの指示に皆の返事が揃う。

「キシヤーアア!」

魔鼠マソは小型犬くらいのサイズのネズミだが、目は赤く爛々らんらんと光り、歯をむき出しにして威嚇してくる。

現代日本においては、ただの野生動物がここまで攻撃性をあらわに近づいてくることはなかった。

——こわっ。って、私本当に戦えるのかな?

今更ながらに不安がこみ上げてくる。画面越しにしか見てこなかった魔物の姿を、こうして目の前にすると、恐怖に足が震えた。

前世の記憶を取り戻す以前のマリーにとって回復魔法を使うことは、呼吸をするのと同じくらい自然にできることだった。しかし前世の記憶が戻ってからは、まだ使ったことがない。その上、実際に魔物と戦うのはこれが初めてだ。実戦の中でも、変わらずに魔法を使えるだろうか。

不安に苛まれつつ、マリーはぎゅつと杖を握る。

「ほら、来い！」

まずはエルネストが魔物に向かって挑発する。そして盾を振り回し、跳びかかってきた魔物に打ち付ける。

魔鼠は盾にぶつかって、うしろへ吹き飛んだ。

今ならば、戦闘経験の乏しいリユカでも余裕を持った攻撃が可能だろう。

エルネストは敵に生まれた隙を見逃さなかった。

「リユカ、やれっ！」

「はいっ！」

リユカは硬い声で返事をした。教皇から与えられたばかりの聖剣を、必死の形相で振るう。

だが慣れない手つきで振り下ろされた剣は、宙を切った。

「ユベール、足止め！」

「はいはい！」

エルネストの指示に、ユベールはのんびりと返事をしつつも、的確に行動する。ユベールが指先で空中に記号のようなものを描くと、宙に浮いたその記号が青白く光った。あれはルーン——古代文字を用いた、ユベールの得意とする魔法だろう。ルーンを使う戦い方は、ゲームと変わっていない。

「ほいっと！」

ルーンは魔鼠に向かって飛んでいき、一瞬で魔鼠を硬直させた。ギユイギユイと耳障りな鳴き声を上げながら首を振ってもがくけれど、魔鼠は地面に縫いとめられたように足が動かなくなっていた。硬直の魔法だ。

「リユカ、今だよー。やっちゃってー」

「ああ！」

ユベールの魔法で固定された魔物は、今度こそリユカの剣によって引き裂かれた。

「キュイイーツ！」

甲高い叫びを上げて絶命した魔鼠は、キラキラと光を放ちながら消えていく。そこに存在していたことが嘘であったかのように。

——はあ……、よかった。回復魔法を使わずに済んで。

実戦での魔法の使用に不安があったことは間違いないが、それよりも仲間たちが傷つかなかったことに、マリーは安堵する。

——あとスブラッタにならなくて、ほんとうによかった。

ゲームと同じようなエフェクトで消えた魔物の姿に、胸をなでおろす。いくら人に害をなす魔物とはいえ、命を奪うことに抵抗がないわけではない。

「ま、最初だし、こんなもんだろう」

そう言って、エルネストが構えていた盾を下ろす。

マリーは気づかないうちに、杖を強く握りしめていた。指の一本ずつを意識して力を抜かなければならないほど、力が入っていたらしい。

「これくらいの消耗度合なら、あと何戦かしても回復はいらねえな」

「……そうだね」

——これくらいの敵相手なら、そうそう傷を負うこともないだろうし、あつたとしても回復魔法だけで十分そう。とりあえず、早々に十八禁的展開に突入するのは避けられそう、かな？

マリーの肩からわずかに力が抜けた。

とはいえ、これではマリーの仕事はほとんどなくなってしまう。なにかほかのことで役に立てないかと思案する。

「あの……、私が硬直^{スタン}の魔法を使ってもいいかな？」

「ん、硬直^{スタン}か……。ユベール、どう思う？」

エルネストがユベールに視線を向けた。

「やってみればいいんじゃない？」

案外軽い返事が返ってきて、マリーは拍子抜けする。

「じゃあ、やってみる」

——とりあえず、うじうじ悩むより、できることからやってみるしかないよね。話を先に進めるためにも経験を積むしかないんだし。レオン様に会うまでは死ぬなんて絶対に嫌だ。そのためには少しでもレベルを上げて強くならないと。

マリーは意気込んだ。

勇者一行の進む街道はある程度整備され、森に比べれば魔物が少ないと聞いていたが、それでも多くの魔物が現れた。はじめは経験の浅いリユカが空回りすることもあったが、戦いを重ねるごとに皆の連携がよくなってくるのがわかる。

エルネストが前線で盾を構えて魔物を引き付けているあいだに、マリーが硬直^{スタン}の魔法

をかけ、リユカが隙をついて剣で切り付ける。それでも倒せない魔物は、ユベールが遠距離から魔法でとどめ、というパターンが出来上がってきた。

「マリー、回復を頼めるか」

もう何体目かの魔鹿^{まか}を倒したところで、その鋭い角で腕に傷を負ったエルネストがマリーに近づいた。

傷は骨までは達していないようだが、大きく切り裂かれた様子で、見ていて痛々しい。

「はい！ 癒^{ヒール}しを！」

——アニキ、すぐに怪我に気づかなくてごめんなさい。お願い、神様！ アニキの傷を治して！

マリーは杖を握りしめ、神に対する祈りを込めて回復魔法を放った。

杖の先にキラキラと白い光が生まれて、エルネストの傷口に吸い込まれていく。傷口は見る間に塞がり、そこに傷があったとは信じがたいほど滑らかな皮膚を取り戻していた。

——よ、よかったあ……

マリーは、前世の記憶がよみがえってから初めて使った回復魔法が成功したことにほっとする。

「助かったぜ。ありがとな」

エルネストは治ったばかりの腕を振って、感触を確かめている。

「どういたしまして。これが私の役目だしね」

どうやらエルネストの腕は問題なく治療できたらしい。

マリーは自分に課せられた役目をきちんと果たせたことに、ほっと人心地ついた。

ゲームではHPが減れば回復すればよかったのだが、現実にはゲームと違ってステータス画面やHPゲージのような便利なものはない。いつ回復魔法を使えばいいのかの判断が難しい。

——敵だけじゃなくて、味方にも注意を払っておかなくちゃダメだね。素早く状況を把握して、先回りして癒^{いや}せるくらいにならないと……

戦闘中に頻繁に立ち位置を変える盾役や攻撃役に回復魔法をかけるのは、難しい。下手をすれば誤って敵に回復魔法をかけてしまうことさえある。

この世界で聖女となるべく育てられたマリーには、しっかりと回復魔法の訓練を受けてきたという自負がある。戦闘中であっても、狙いを誤らないだけの實力があることはわかっていた。

しかし、實力があっても実戦で使うとなるとまた別問題だ。うまく立ち回れない自分

に、マリィは落ち込んだ。

「マリィ、僕の魔力もそろそろ危うい。回復してもらえる？」

今度はユベールから声をかけられた。

「はいっ！」

落ち込んでいる暇などない。今は戦いの最中なのだ。マリィは気持ちを引き締め直し、ユベールに向けて、魔力の回復魔法を使った。

「マジック・ヒールに癒しを！」

魔力の回復は、自分の魔力を相手に譲渡するものだ。当然かなりの魔力を消費するため、ヒールの魔法に比べると、何回も使えるものではない。しかし、マリィは使える魔法こそ少ないものの、膨大な量の魔力を持っていた。マジック・ヒールは魔力量の多いマリィだからこそ使える魔法といっても過言ではない。

杖の先に生まれた青白い光は、ユベールの身体に吸い込まれていく。

「ん、満杯だ。ありがとー」

にこりと微笑むユベールに、思わずマリィもつられて笑った。無邪気に微笑む姿とても脳筋腹黒魔法使いには見えない。

ちなみに攻略相手に回復魔法をかけることで、微量ではあるが好感度も上がる。とは

いえこの程度ならばユベールの攻略ルートに入るほどではないだろう。これほど喜んでもらえるのであれば、マリィはこれからも積極的に回復魔法を使おうと心に誓った。

「はい。どういたしまして」

「それにしても、マリィの回復魔法は鮮やかだね。これほど優秀だとは思わなかったなあ」ユベールの顔にははつきりと賞賛が浮かんでいた。

魔法使いとして経験を積んでいるユベールに褒められ、マリィは気恥ずかしくなった。「そう？ ユベールさんみたいに詠唱なしでは使えないから、褒められると恥ずかしいんだけど……」

——やっぱり、詠唱破棄って憧れるよね。私もユベールみたいにルーン魔法が使えたらよかったのになあ……

「ん？ ちょっと待って？ あれで？ マリィの詠唱は結構短いと思うんだけど？」ユベールは心底不思議そうな表情で、こてんと首を傾げた。

「なあユベール、魔法を使う時に詠唱するのは普通のことなんだろう？」

同じく不思議そうな表情を浮かべているリユカは、あまり魔法に詳しくないのだろう。魔法に関しては、この中で一番の専門家であるユベールの意見を求めた。

「そうだよー」